

カルメンの気持ち

応用化学科 2 年 N. T.

はじめ私は、カルメンはただ男を誘惑し、自分に夢中にさせておいて捨てるような悪女かと思った。だが、○カルメンは常に自分の気持ちに正直で、他人に強制されるのが嫌いなだけなのだと思う。他人の気持ちを考えないと言ってしまえばそれまでだが、○自分中心に生きるというのも、カルメンほどのものとなると逆にすがすがしいとさえ思う。

では、カルメンはホセのことを本当に愛していたのだろうか。○そもそもホセのような面倒くさそうなタイプに手を出さずとも、男に不自由していた訳ではあるまい。ホセは見た目通り、生真面目でお堅く、悪く言えばしつこい性格だ。カルメンにはホセのような男でなく、自由奔放なカルメンを許せるような、度量の広い男が似合うと思う。これはカルメン自身も、改めて考えたことこそないだろうが、そう感じていたと思う。同じように、真面目な性格の男に手を出したら大変そうだ、とも感じていただろう。しかしカルメンはホセに惚れた。おそらくはこれまで付き合ってきた男とはまるで違うタイプだろうが、どうしようもないくらいホセのことを好きだったのだと思う。きっかけはからかい半分だったかもしれないが、次第にカルメンの中で恋は本物に変わっていったと思う。

理由をいくつか挙げる。まず第二幕の酒場の場面。兵舎に帰らねばと言ったホセに対し怒ったカルメンだが、ホセの真剣な告白には心奪われ、互いに抱き合っている。この後ホセに、愛しているならば自分を山へ連れて行くはずだと言う。冒頭でも述べたように、カルメンは自分の気持ちに正直だ。ホセと一緒に山に行きたいという気持ちをストレートに表している。この時点で本当にホセを拒絶していたならば、この後再び抱き合うことはないはずだ。地位より自分を選んで欲しいという純粋な気持ちをそのままぶつけているだけなのだ。だが、ロマの生活原理とホセの属する市民社会の原理は相容れない。この場面でも、ホセの絶唱のおかげで抱擁するが、結局ホセは Non! と言って連隊に帰営しようとする。決裂がしかるべき落着だった。ただし中尉が訪問してきたために、この落着も無効になってしまう。

次に、第三幕で繰り返しタロット占いをするカルメン。この場面が、友人たちと混ざって楽しく占いをしていただけならば、単にタロットの結果が物語の結末を暗示しているというだけの場面だ。しかし彼女たちから離れ、一人暗い面持ちで占いをするカルメンは、たかが占いであるにもかかわらず、ホセとの

関係はどうなるのかをひどく知りたがって、占いの結果にすがろうとしているようにも見える。カルメンがホセを、単なる遊びではなく、真剣に思っていることの現れだと考えられる。

最後に、四幕終盤の闘牛場での場面。死を覚悟でホセと向き合ったのは、一度は真剣に愛した男だからだったのではないだろうか。ホセに理解してもらおうと努めた結果なのではないだろうか。(理解してもらえないかもしれない、それならそれでもいい。ただ、自分の生き方を認めてもらいたい。) そう思えたのも○一度はホセを愛していたからなのだと思う。

結末が死によって迎えられるのは最も悲惨なエンディングだが、この物語はこの終わり方しか無いように思う。○ホセの狂気とも取れる感情は、カルメンの愛か死かを得ない限り収まりようがないと思うし、○カルメンは死と引き替えであっても自分の生き様を否定するような女ではないと思う。あえて挙げるとしたら、カルメンを殺した衝撃と絶望で、ホセはすぐ自殺したのではないだろうか。それこそ、スカルピアを殺し、カヴァラドッシも失ったトスカが自ら命を断ったように。カルメンのトランプ占いの結果は、カルメンとホセ、ふたりとも死だった、ならばやはり、ともに死を迎えたのではないかと思う。